奈良教育大学

平成 28 年度 第 5 次陸前高田市文化遺産調査報告書



平成 29 年 3 月 平成 28 年度 奈良教育大学 ESDを核とした教員養成の高度化プロジェクト -教員養成・研修におけるESDモデルプログラムの開発と普及-

目 次

はじめに ・ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
平成 28 年度 第 5 次陸前高田市文化遺産調査実施要項 ・・・	3
平成 28 年度 第 5 次陸前高田市文化遺産調査報告概要・・・	4
陸前高田市文化遺産調査に参加して 栗谷正樹・・・・・・・	8
私が陸前高田市で学んだこと 唐澤亜由美 ・・・・・・・	10
被災時に意識すべきこと 辰巳太基 ・・・・・・・・・	12
陸前高田市文化財調査に参加して赤津將之・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	14
陸前高田市での調査を振り返って 佐野宏一郎 ・・・・・・	16
第5回陸前高田市文化遺産調査に参加して 後藤田洋介・・・	18
ESD子ども用教材 陸前高田市ボードゲーム ・・・・・・	20
陸前高田市文化遺産調査におけるESD教材開発(6)・・・・	23
宮城県気仙沼市地福寺仏像調査報告書 ・・・・・・・・・	38

平成 28 年度 第 5 次陸前高田市文化遺産調査実施要項

1. 目的

2011年3月11日の東日本大震災及び大津波により、陸前高田市をはじめとする岩手・宮城・福島三県の太平洋岸は大きな被害を受けた。陸前高田市では市民の約1割にあたる人命が失われたほか、市庁舎を始め、博物館や図書館、文化ホール等の市の重要施設が被災した。多くのものを失ってしまった。しかし、幸いにも高台にあった寺の仏像は被災をまぬがれた。この仏像等の文化遺産を調査し、その価値を明確にすることが、陸前高田市や周辺市町村の市民を元気づけることになると考え、本調査団を派遣する。併せて被災地の状況を視察し、被災された方から聞き取りを行い、現地に学ぶ防災教育を展開することで、ESDの理念に基づく被災地支援とその教育への応用を実現する。

- 2. 主催 奈良教育大学
- 3. 実施月日 平成28年9月7日(水)~ 10日(土)

4. 活動内容

- (1) 陸前高田市の児童生徒が、文化遺産を通して地域の価値を見い出す事を目的とした教材を作成するために、文化遺産調査を行い、情報を収集する。
- (2) 陸前高田市の復興状況について、被災者からの聞き取り、復興状況の視察等を行い、全国の学校教育で活用できる防災教育に関するモデルプランを作成する。

5. 参加者

大学教員:山岸公基、中澤静男

大学院生: 栗谷正樹、赤津將之、後藤田洋介、辰巳太基

学部生 : 唐澤亜由美、佐野宏一郎 計8名

6. 成果について

(1) 成果報告書

調査報告については、参加者全員が報告書を作成し、学び喜びプロジェクトの報告書に記載する。

(2) 調査成果発表会

調査に基づく模擬授業などの成果発表会を行う。

(3) その他

調査結果を基に陸前高田市の児童生徒を対象とした教材を作成し配布する。

これからの防災教育について研究し、本学の次世代教員養成センターの紀要に報告文・学習指導 案を作成し応募する。

平成 28 年度 第 5 次陸前高田市文化遺産調査 概要報告

次世代教員養成センター 中澤 静男

◇日時 平成28年9月7日(水)~10日(土)

◇参加者 学部生 : 唐澤亜由美、佐野宏一郎

大学院生: 栗谷正樹、辰巳太基、赤津將之、後藤田洋介

大学教員:山岸公基、中澤静男

◇宿泊地 吉田民宿(陸前高田市米崎町)

◇日程・活動

9月7日(水)

- ・真城寺(奥州市水沢区真城上野5)阿弥陀如来立像の調査
- ・黒石寺 (奥州市水沢区黒石町山内 17) 薬師如来坐像・十二神将立像の見学
- 9月8日(木)
- · 陸前高田市教育委員会表敬訪問
- ・陸前高田市消防防災センターでの聞き取り調査
- ・りくカフェでの聞き取り調査
- ・地福寺(気仙沼市唐桑町馬場 178)地蔵菩薩立像の調査
- ・唐桑半島ビジターセンター・津波体験館視察と聞き取り調査
- 9月9日(金)
- ・向堂観音堂(気仙郡住田町)十一面観音坐像調査 3Dスキャナーによる撮影
- ・コミュニティセンターでの津波体験・避難所生活体験の聞き取り調査
- ・常膳寺(陸前高田市小友町字上の坊)十一面観音菩薩立像・千手観音菩薩立像調査 3Dスキャナーによる撮影
- ・千田氏の水産加工場にて、避難所運営に関する聞き取り調査
- ・及川氏宅にて、高田松原を守る会の活動に関する聞き取り調査
- 9月10日(土)
- ·薬師神社(大崎市田尻小松)十二神将立像調査
- ・湊浜薬師堂(七ヶ浜町薬師)磨崖仏の3Dスキャナーによる撮影



湊浜薬師堂での3Dスキャナーによる撮影



陸前高田市消防防災センターでの聞き取り調査

◇ESD・防災教育における今回の調査目的について

昨年度の陸前高田市文化遺産調査団の報告会の様子が撮影されたSNSから、岩手日報が東日本大 震災時の犠牲者の行動記録を再現した連載記事を掲載した。今回の調査においては、事前に調査協力 者である陸前高田市の及川征喜氏より送付していただいたそれらの記事をもとに事前学習会を行っ た。そして、陸前高田市における大震災前後での防災マニュアルの変化と避難所運営の実際、被災者 の心のケアに焦点化した聞き取り調査を行った。

◇消防防災センターでの聞き取り調査に関して

陸前高田市防災局防災課中村課長補佐より、「陸前高田市東日本大震災検証報告書」並びに「避難マニュアル」をもとにお話をうかがった。陸前高田市では次の2つの点に関して検証を繰り返し、教訓を生かした防災対策を検討されている。一つ目は大震災前の5月にチリ地震大津波での被災をもとに始まった避難訓練をしていたにもかかわらず、なぜ、大きな被害を出してしまったのか、二つ目は、陸前高田市は津波被害によりすべての都市機能を失った稀有な例であることから、陸前高田市での減災・復興に関する取り組みが、同じような環境にある世界の各都市の防災や減災の手本でありたいという願いである。

「陸前高田市東日本大震災検証報告書」の検証作業から得られた教訓をもとに考察を加えたい。

(1)避難が何より重要

陸前高田市の「避難のタイミングと被害状況」に関する調査によると、被害がなかった人の8割は、地震発生直後(午後2時46分頃)から津波到達前(午後3時30分頃)までに避難していたが、津波による死亡者や行方不明者では、避難したのは5割程度であり、4割は避難していなかったことが明らかになった。多くの人が避難しなかった理由は2つ考えられる。一つは避難の必要性を感じなかったことである。2016年4月14日の熊本地震では、多くの家屋が倒壊している様子がテレビ等で報じられたが、陸前高田市では、東日本大震災の地震による家屋倒壊はほとんどなく、家屋被害の原因は津波であったことである。りくカフェで聞き取り調査させていただいた鵜浦淳子氏は、JR陸前高田駅近くで医院をされており、地震発生直後に避難されているが、駅前の商店街では散乱した商品を片付けている人が多くあり、避難を促しても「後で行くから」と商品の片付けを続けている人が多かったと述べられているが、家屋倒壊がなかったことが心にスキをつくってしまったのかもしれない。もう一つの理由は、高齢者や体の不自由な方々のように、避難したくても自力では困難な方々の存在である。日本をはじめ多くの先進国は高齢化社会になっており、災害弱者の救済は共通する課題である。少なくとも病院や高齢者福祉施設、障害のある方の福祉施設や作業所などは、津波による浸水がない場所に設立すべきである。

(2) 避難所に逃げたら終わりではない

陸前高田市では津波避難場所として一次避難所を 67 カ所していたが、そのうちの 38 カ所に津波が到達し、9 カ所の一次避難所において推計 303 人~411 人の犠牲者を出してしまった。平成 16 年度に岩手県が公表した津波浸水予測図をもとに平成 18 年度までに見直された地域防災計画に基づいて一次避難所が指定されているのであるが、なぜ、海抜 0 メートル地帯にある市民会館や市民体育館までが一次避難所に指定されたのであろうか。「陸前高田市東日本大震災検証報告書」では、県の津波予測が市民会館で 50 cm以上 1m 未満、市民体育館は 1m 以上 2m 未満であったことから、津波避難ビルの考え方に基づいて指定していたと記されている。しかし、陸前高田市は昔から津波被害の多い地域として認識されており、1896 年明治三陸地震津波においても 22m の遡上高(大船渡市)が記録されているほか、1933 年の昭和三陸地震でも 28.7m(大船渡市)の遡上高、1960 年のチリ地震津波において

も 4.9m (大船渡市) の遡上高を記録していることを考えると、県の津波予測を批判的に捉えることなく、一次避難所を指定したことは大きな問題である。2016年(平成 28 年)3月5日(土曜日)発行の『岩手日報』は「犠牲者の行動記録」という特集において、「陸前高田市の最大の特徴は、避難所に逃げた多くの人が津波にのまれた点が挙げられる」とし、「自宅よりも海側にあった市民体育館へと向かった」津波犠牲者の例を掲載している。陸前高田市では 1960 年 5 月 22 日に発生したチリ地震津波を教訓に、毎年 5 月に避難訓練をしていたが、避難訓練通りに避難して被災された方も多かったと思われる。

中村課長補佐によると、陸前高田市では今回の被害をもとに新しくハザードマップを作成し直し、 今回の津波でも浸水がなかった地域を避難所に指定されている。また、避難所となることが多い公立 学校も、小友小学校以外は、浸水しなかった地域に建設されていることから、避難所指定については 改善されている。

(3) 公的な役割を持つ人の安全の確保

陸前高田市は津波被害によりすべての都市機能を失ったと上述したが、それは市庁舎や博物館といった施設の被災だけではない。人的被害においても、公的な役割を持つ人々に多くの犠牲者が出ている。市職員(嘱託・臨時職員含む)の 25.1% (111 人)、消防団員の 6.8% (51 人)、行政区長の 10.5% (11 人)、民生委員児童委員の 13.3% (11 人)の他、陸前高田市立博物館の職員 6 名全員が死亡、陸前高田市立博物館も職員 6 名全員が犠牲となっている。これらの方々の多くは、市民の避難誘導や情報収集、水門や陸閘の閉鎖作業、要配慮者の安否確認などに携わっている最中に被災したと考えられている。これら公的な役割を持つ人々の命も、他の人々と同じように尊い命であることの他、災害からの復興において公的な役割を持つ人の不足は、復興にとってマイナス要因となる。

これら公的役割を持つ人々の被災要因として、明確な退避基準が設けられていなかったことが考えられるため、中村課長補佐によると、①命を守ることを最優先にすること、②津波到達時間の 10 分前までに避難所にいること、の 2 つを職員に対して明文化するとともに、平成 27 年 3 月発行の避難マニュアルにおいても、「災害対応や避難誘導にあたる人も、身の安全の確保が最優先です。ラジオや携帯電話などから避難や気象等に関する情報を得て、切迫した状況となる前に避難することが重要です。」と記載されている。中村課長補佐によると、津波の遡上速度は時速 40 kmにもなるため、津波を目視してからの避難では間に合わないことが考えられる。公的な役割を持つ人が率先して避難する姿を見せることで、市民の避難行動を促すこともねらいの一つであるとおっしゃっていた。

(4) 災害に強い安全なまちづくり

今回の津波被害を教訓として、陸前高田市では、災害に強い安全なまちづくりを目指し、ハード面、ソフト面を組み合わせた対策に着手されていることをうかがった。ハード面としては、12.5mの防潮堤の建設である。かつての高田松原周辺で、すでに建設された防潮堤を目にすることができたが、12.5mの防潮堤は横に長いビルが連なっている感じで、その向こうに海があることを忘れてしまう。前述した岩手日報、2016年3月8日(火曜日)の特集記事として、巨大堤防を過信し、多くの人たちが避難しなかったことで被害を拡大してしまった宮古市田老地区の例が掲載されている。田老の防潮堤は、昭和三陸大津波の教訓として1934年~57年に建設された高さ10mの三つの防潮堤を中央部で接続した「X型」と呼ばれるもので、1960年のチリ地震では被害を防ぐことができた。しかし巨大防潮堤に対する過信が逃げる意識を鈍らせたのだろうと指摘し、夫が犠牲になった佐々木トモさんの、地元では過去の大津波で被災した経験から毎年避難訓練が行われてきたが、「参加しない人を中心に犠牲になった」という言葉を紹介し、防災意識の希薄化が被害につながったと述べている。

陸前高田市では、防潮堤というハード面に頼るだけでなく、毎年 11 月に市民全員による避難訓練を行っている。この避難訓練の内容も今までは、①避難訓練参加者の人数確認、②避難に要した時間の計測、③「早かったですね」というルーティン化したものから、市指定の避難所だけでなく、それ以外にも日ごろから安全な場所を見つけておくことを奨励し、自分で安全な場所を考えて避難することとへと変わったと、中村補佐はおっしゃっていた。

また、学校での避難訓練では、これまで行っていた親に子どもを引き渡すことは禁止し、児童生徒だけでなく子どもを引き取りに来た保護者も帰さない方針へと 180 度変わっている。というのも、今回の津波による浸水地域にある学校は 1 校だけであり、学校にいることが安全であるためだ(浸水地域にある学校では、高台への避難訓練を行っている)。

(5) 社会的弱者も安全に生活できる社会の実現

高齢者、障がい者、乳幼児等の社会的弱者の避難施設として、4月の熊本地震では福祉避難所の必要性がクローズアップされていた。しかし陸前高田市では「ノーマライゼーションという言葉のいらないまちづくりに向けて」というスローガンのもと、「要配慮者の避難」という項目を避難マニュアルに設け、広く市民に知らせるとともに、特別に福祉避難所をつくるのではなく、住民一人一人が避難所の運営主体となって、避難所内に福祉避難施設をつくってもらうという施策を実施されている。

(6) まとめ

中村課長補佐は、消防防災センターからの避難情報の発し方にも2つの変化があったとおっしゃっていた。一つは、「空振り」を恐れず積極的に避難情報を伝え、市民の避難を促すことで、私たちが消防防災センターを視察した夜にも、2回も携帯電話が鳴動し、避難に関する情報の提供があった。二つ目は、津波に関する情報提供の変化である。これまでは〇mの津波が来るといった、津波の高さも情報に伝えていたが、かえって「津波を見物してやろう」という行動を誘発してしまったことから、津波の高さは伝えずに、避難情報だけを伝える方法に変化している。

以上のような行政の取組に対して、住民がそれをどのように受け止め、活用していくかが重要である。官民一体となって取り組むことで、災害に強いまちづくりが実現されていく。今の防災意識を維持し、マニュアルと研修をセットにした市民の防災スキルの向上が重要であると感じる。



唐桑半島ビジターセンター・津波体験館



建設中の 12.5m の防潮堤 (旧高田松原付

2016 年度 陸前高田市文化遺産調査に参加して

社会科教育専修 修士1回生 栗谷正樹

平成28年9月7日から10日にかけて、岩手県陸前高田市を中心に文化財調査並びに防災教育の一環としての現地見学・聞き取り調査を行った。今回の調査では、防災教育班として参加し、現地では市職員、市民、元議員など様々な立場の方から震災に関するお話を伺うことが出来た。

聞き取りを実施したなかで学んだことは次の 4点である。1点目に避難所生活の実態ついて、 2点目に避難所運営について、3点目に地域を知 ることの重要さについて、4点目が復興にはまだ 時間が必要であるということである。

(1) 避難所生活の実態ついて

1点目の震災当初、新聞等ではあまり報道されなかった避難所生活の実態ついてである。陸前高田市在住の菅野さんは、退職を契機に関東から陸前高田の家に戻った2年後に震災に遭った。避難所では、被災者のコミュニティを重視し、地区ごとにスペースを分けるケースが多かったようだ



コミュニティセンター屋上より市内を望む 旧市街地では、かさ上げ工事が進む

が、長年、関東に在住していた菅野さんは近所に顔見知りや親族いなかったため、話し相手がおらず、 避難所では現実の過酷さに加えて孤独さにも苦しめられたそうだ。私の住む大阪はマンションが多く、 近隣の人々とのつながりが薄いように思われる。日常から地域の方とのコミュニティづくりを行ってい く必要があるように感じた。

(2)避難所運営について

2点目は、避難所運営についてである。避難所は、運営者の手腕によって環境が大きく異なる。運営者がいかに「平等・公平」に実施するがポイントになるかということを学ぶことが出来た。また、災害発生時は、炊き出しや運営等を行う方も同じ被災者である。お客様気分ではなく、「自分たちが出来ることは自分たちでやる」という意識を持つことの重要性を教えていただいた。

上記2点に関しては、陸前高田市の教育委員をされている松坂さん、元新聞記者で陸前高田市在住の及川さん、菅野さんのなど多くの方から指摘していただいた(なお、私は本研修後に宮城県気仙沼市にて防災教育の研修会に参加したが、そこでも同様の声を聴くことが出来た)。災害発生時、多くの学校が避難所となる事を考えると、基礎知識の習得や避難方法など、発生前・発生時に関する学習だけでなく、避難所運営や避難所生活での留意点など、発生後に関する学習も実施していく必要があるように思われる。とくに避難所運営に関しては、日中に災害が発生した場合、教員が設営・運営に従事しなければならないことも予想される。運営方法や被災者の孤独の解消法等、教員に対する教育や研修も必要であるように感じた。

(3)地域を知ることの大切さ

3点目は、地域を知ることの重要さである。及川さんは、職業柄、日常生活の中で疑問を持つがあれば、過去の文献・石碑・地名に着目されることが多いそうだ。及川さんは以下のように教えてくださった。「旧気仙郡の文献に当たった際にも、さりげなく書かれていた "津波○○名死亡"という記述を契機に、陸前高田の地震・津波に関する文献を読みあさった。さらに、陸前高田市内には、あちこちに石碑があり、『ここから下に建物を建てるな』といった先人のメッセージが記されている。地名に着目すると、平野部にある地名、例えば、沼田は、もともとは田と沼、脇ノ沢はもと沢だった。地名から地理的特徴が掴むことが出来る。本来は人が住む所ではなく、実際、明治時代まで平野部に建物はほとんどなかった。しかし、昭和のチリ津波後、5~6mの防潮堤建設を契機に平野部が開拓され、過去の忠告に耳を傾けることなく市街地が形成された。そして今回の震災で大きな被害が出てしまった。やっぱり先人の教えは無視できない。」教員は、赴任する学校が出身地域でないことがほとんどであるように思われる。校区の地名から地理的背景を学ぶ、近くに石碑がないか確かめる、過去の文献に当たるなどの活動を行い、まず教員が児童・生徒に防災・減災教育を実施する前に地域について知ること、その際に、先人の教えを活用するということが重要であるように感じた。

(4)復興にはまだ時間が必要

最後に学んだことは、復興にはまだまだ時間が必要であるという点である。震災発生から 5年が経過した現在、私の暮らす関西で東北の現状を報道がなされることは、3月11日前後を除いて非常に少なくなってきている。今回、初めて陸前高田市を訪問したが、市内ではかさ上げ工事並びに 12.5mの防潮堤建設が続いており、かつて市街地であった地域にも新しい建物はほとんど見られなかった。私自身も、訪問以前にもっていたイメージとは異なった町の姿に驚かされた。このような街の変貌については、現地にてお話を伺った際、防潮堤で海が見えなくな



沿岸部では、高さ 12.5m の防潮堤建設が進む

ることは逆に危険なのではと言う声も聞かれた。また、「東京や関西では、もう復興が完了したと思い込んでいる人もいるようだ」という声も耳にした。震災の風化を防ぐためにも、防災・減災教育を通して被災地の"今"を定期的に発信し続けることも必要である。

(5) まとめにかえて

本調査では、公平な避難所運営や日頃からの近隣住民との関係づくりの重要さなど、報道からはあまり見えない多くのことを学ぶことが出来た。その一方で、都市部ではマンション住まいや単身住まい等が多く、住民間でのコミュニケーションが希薄していることや、災害発生時には、地元住人だけでなく国内外の観光客などが避難所に来ることも考えられ、被災地のような運営は難しいように思われる。また、津波非常襲地域であるため、住民の津波に関する意識や知識も低いように思われる。

子どもたちに防災・減災教育を実施することも重要ではあるが、その前段階として、教員側が上記に 記載したような点を理解・習得することが必要であるように感じた。

私が陸前高田市で学んだこと

家庭科教育専修 4回生 唐澤亜由美

1、はじめに

東日本大震災の被災地を訪れるのは今回で5度目だ。3年前に初めて訪れた被災地が、偶然にも今回の調査でお世話になった陸前高田市であった。当時18歳だった私は陸前高田市で、「同じ悲しみを二度と味わってほしくない。次世代を担うあなたのような若者が、ここで見た現実を自分の地域に持って帰り、防災を考えていかなければならないのだよ。」と、涙ながらに語ってくださった被災者と出会った。東日本大震災に悲しみを感じるだけで終わってはならないのだということを気づかせてくれた言葉であり、以後私が防災について考えていく全ての根本になった出会いであったとも言える。そこから私は、少しずつ防災を「自分の問題」として考えるようになった。また被災地の学校を訪れ、子どもたちの現状とともに、被災当時の子どもたちの状況を学ぶなかで、学校、教員として、子どもの命を守るための防災対策について考えるようになった。そこで今回、「教員として準備しておくべきこと」「避難所運営にあたり必要なこと」に関して、特別支援学校教員として福祉的な視点も交えながら学びを深めたいと思い、調査団への参加を決意した。

本調査では、多く方々からお話を伺う、数多くの貴重な機会に恵まれた。本調査で学んだことを「教員の防災意識」「避難所運営」そして「防災教育と文化財教育」の三つの観点から述べていきたい。

2、教員の防災意識

災害時、教員として即座に適切な判断を行い、子どもたちの命を守るために防災意識を高めておくこと、準備をしておくことはもちろん重要なことである。しかし、奈良県は特に教員の防災への意識が低いと感じている。奈良市内では、避難所指定の締結のみで、福祉避難所指定されている特別支援学校と市との連携はほぼ皆無である。その現状に虚しさを抱いていた私であったが、3日目に及川氏宅に伺った際、及川氏の奥さまが「行政がやってくれる、やってくれない、と思うのではなく、市民一人一人が自分から発信し、行動していくことが大切」とおっしゃった言葉が心に刺さった。教員を志す私自身、防災対策は行政がやるべきことだという認識をどこかに持っていたのかもしれない。確



そびえ立つ奇跡の一本松を見て、 人々は何を思うのだろうか・・・

かに、行政が先導に立って防災対策を進めていく必要があるが、子どもたちの命を守る防災対策を講ずるにあたっては学校全体として動き出す必要がある。そのために教員一人一人が防災の必要性を「自分の問題」として捉えることが大切なのだということを改めて認識させられた瞬間であった。教員一人一人が防災を「自分の問題」として捉え、一人一人の防災意識を根本的に変革していくことが今、私たちが取り組んでいくべきことではないだろうか。そのために、私は陸前高田で学んだ被災地の現実を奈良県で伝え続けたいと思う。

3、避難所運営

避難所となったキャンプ場で、中心的に避難所運営を行っておられた千田氏に、当時の状況を伺った。 報道では知ることができない、生の避難所の様子を伺うことができ、大変貴重な時間であった。

千田氏が繰り返しおっしゃっておられた「運営者によって、その避難所の雰囲気、状況は大きく変わる」「避難所運営でもっとも大切なことは、公平性」という言葉が特に印象深かった。簡単に聞こえる言葉かもしれない。しかし、実際に大変な状況下で避難所運営をしてこられた千田氏のその言葉からは、計り知れない重みを感じた。自らも被災している状況で、一体どれほどのご苦労があったことだろうか…。避難者一人一人の被害の実態、必要な支援が異なる中で、公平性を重んじて避難所運営を行うということの難しさ、重要性をひしひしと感じた。

またこの話は、福祉避難所と指定されている特別支援学校の避難所運営にも、大きく関わると感じている。大規模災害時、必ず学校は避難所となる。避難者自身で避難所を運営する、自主運営が基本とされておりもちろん重要なことであるが、福祉避難所において自主運営は困難であると言える。災害時であるからこそ、障害のある子ども一人一人への細やかな支援が必要であり、自然と教員が果たすべき役割の重要性が浮き彫りになる。想像を絶する避難所運営の状況を伺い、教員が子どもたちの命を守るために、避難所となりうる学校の「避難所運営まで見越した防災対策」を行う必要性を改めて強く感じた。

4、防災教育と文化財教育

山田教育長が、「文化財をよく知ることが地域をよく知ることに繋がり、そして郷土愛を育むことに繋がる」とおっしゃっておられた言葉が印象的であった。文化財を知ることで、地域を愛するとともに先人の経験した出来事にも興味を持つ。地域を愛し、震災について学んだ子どもたちは、その地域を守るために防災を「自分の問題」として捉え真剣に取り組んでいくのではないだろうか。今回の調査は、防災教育と文化財教育との繋がりについても考えるきっかけにもなる時間となった。

5、おわりに

本調査を通して、私たち一人一人が防災を「自分の問題」として捉えることが今後の重要な一つの課題であると強く感じた。震災後の陸前高田市では、市で行う避難訓練を指定の場所に避難する形ではなく、ハザードマップを見て、自分でどこに逃げるか考え、決めるという形で行っていると伺った。この防災訓練は、まさに、防災について真剣に考え、防災を「自分の問題」として捉える大きなきっかけになるものだと考える。従来の防災訓練ではいけない。奈良県全体、学校現場全体で私たち一人一人が心の内側から防災意識を根本的に変革させていく必要がある。私は教員として、「防災訓練をなぜ行うのか」「子ども



高台から見た陸前高田の町

の命を守るために必要なことは何か」「防災を自分の問題として捉えるために必要なことは何か」について追求し続けていこうと思う。

本報告に記した内容は、今回の調査で学んだ一部分である。多くの方とお話しさせていただき、本報告に記しきれない濃い学びの時間を過ごすことができた。ご協力くださった陸前高田市の方々をはじめ、すべての皆様に感謝申し上げたい。本当にありがとうございました。

被災時に意識すべきこと

理科教育専修 修士1回生 辰巳 太基

1. はじめに

今回の調査では震災を経験された方々から、震災当時の体験談を聞かせて頂く機会に恵まれた。山田教育長、陸前高田市消防防災センターの中村吉雄様、震災当時避難所で指揮を取られた千田勝治様、陸前高田に移住してすぐ被災することになった菅野浩子様、 津波から間一髪助かった被災男性、震災以降ママ友同士で協力しカフェを営むようになった被災女性、そういった方々の貴重なお話に耳を傾ける中で私自身が考えたことは2つある。それは避難所におけるリーダーの重要性と、震災後に個人が自助の精神を持って行動することの重要性であった。

2. リーダーの重要性

まずは避難所で指揮を取るような、人々を導く立場のリーダーシップから考えていきたい。このような立場に立つ者には、「いかにして人々を導くか」ということが求められると私は考える。聞き取り調査を踏まえて、私が感じた被災時における避難所のリーダーに求められること、それは「公平さ・情報の透明化・周りを頼ること」の3つであった。これから一つ一つについて詳しく述べていきたい。

まずは「公平さ」という点についてである。これは実際に避難所において指揮をとられた千田氏が繰り返し述べておられたことである。避難所にいる人を老若男女で差別しないことは勿論、身内や友人も絶対に贔屓しないということを強く話してくださった。また、病気の人などの特別な配慮が必要な人に関しては、災害弱者用の部屋を用意し外部からの救助を優先的にしてもらう、といった合理的配慮も必要と話してくださった。

次に「情報の透明化」である。このことについても、千田氏は徹底したと繰り返し述べられていた。 実際にされた実践としては、配給物資をすべての人が見える場所に常に置いておく、といった行動がそれに該当する。被災時は普段よりも精神状態が不安定である。そのような状況下で避難者からの不満が出てこないためには、情報の透明化は避難所を運営する立場としては常時徹底して意識しておかなければならない。

最後に「周りを頼ること」である。これはインタビューを通して私自身が強く感じたことである。リーダーとは常に周囲に対しての気配りなど、人一倍神経をすり減らす立場にある。その上忘れてはならないことが、「避難所のリーダーもリーダーである以前に一人の被災者である」ということである。故に避難所のリーダーが抱える負担というものは想像を絶するほどのものであるように推測される。その上、被災時という異常事態の状況下においては、周りの人々に助けを求めるのは困難であろう。最悪の場合、一人ですべてを抱え込んでしまい精神的に追い込まれてしまうといったケースが起こりうる。私が今回インタビューを行った千田氏は、身内をまずは足がかりにして徐々に協力的な人物を増やしていくという手段を取ったと話してくださった。千田氏はリーダーの仕事を分散させるよう努めたが、それでも不眠症などの症状が現れ、苦しんだとおっしゃっていた。

3. 個人が自助の精神で行動すること

個人が自助の精神を持つということは、避難時に自分の身は自分で守るということはもちろん、避難が完了した後の避難所での生活においても大切である。避難所では被災者が被害者意識に囚われてしまってすべてを周りに任せるのではなく、大変な状況であるからこそ自分ができることを主体的に見つけ、

行動していくことが大切である。今回聞き取りをさせていただいた菅野氏は、「避難した当初、自分は被害を受けた側だからってただ支援されるのを待っていただけだった。でも、市の職員の方に『自分のことは自分ですること』と喝を入れられてハッとした。それからは自分のことは自分でするだけでなく、以前働いていた会社で総務の仕事をしていたことを活かして、市の職員の方を手伝うようになった」と話してくださった。被災時という異常な状況は、人々から周りを見る余裕を奪ってしまうということが生々しく感じられた。菅野氏をはじめ、聞き取り調査をさせていただいた方々のお話からは、「非常事態であるからこそ、まずは自分の身は自分で守ること。ぞして個人が主体的に行動し、人と人が思いやりを持って寄り添って生きていくことが大切」というメッセージを受け取った。



図:千田氏、松坂氏への聞き取り調査

4. おわりに

今回の聞き取り調査では被災者の体験談を通じて震災について学ばせて頂くことができた。被災時においては一瞬一瞬の判断が自分や周囲の人々の命を左右する、ということを感じ「もしも私自身が被災して同じ状況だったらどうするか」と考えるようになった。いざ被災したときに、自分で自分の命を守り、そして自分以外の人も守れるような判断を下すために、今から防災について学んでいきたい。

陸前高田文化遺産調査に参加して

造形表現・伝統文化教育専修 修士1回生 赤津 將之

1. はじめに

平成28年9月7日から10日にかけて、陸前高田市を主とした岩手、宮城県の文化遺産調査および防災教育に参加させていただいた。私は前年度の陸前高田文化遺産調査団に参加しており、今年が二度目の参加であったが、昨年の状況や見知ったことが、一年の経過を経てどのように変わっているかについては気がかりであった。今回実際に訪れてみて、昨年よりも変化していることは多かった。また文化遺産調査についても、様々に体験することや得ることも多かった。ここではその内容について、被災地の変化と防災、文化遺産調査の2つの観点から述べていきたい。

2. 被災地の変化と防災

私は昨年度の陸前高田文化遺産調査で被災地の状況を見ている。仙台空港からの道中、各所に津波の 到達を示す看板が立ち並び、山肌の木々がある線を境に枯れているのを見て津波が想像もつかない距離 まで到達していることを感じたことを覚えている。陸前高田市内は、震災遺構として保存が決まった建 造物が数ヶ所残る以外は、土地の嵩上げ工事の真最中であり、当時まだ稼働中だった大型ベルトコンベ アー「希望の架け橋」によって山肌から土が運ばれ、それを運搬する大型重機が走り回っていたことを 覚えている。

今年の状況については、稼働を終えた「希望の架け橋」は一部を残して解体され、昨年のような巨大

な姿を僅かにとどめていた。嵩上げ工事 はその範囲を去年よりも拡大し、またそ の高さもより高いものになっていたと思 う。海辺に建造されていた新しい堤防は その長さを更に伸ばし、ベルトコンベア 一が消えた浜辺に新しくその姿を見せて いた。一見して思ったところは地形が去 年と同様に大きく変化を遂げており、一 年の間に環境が一変しているということ であった。ただし今も残る震災遺構は、 津波の傷跡を現在でも如実に示している ように思った。



海岸線に建設されている防潮堤

陸前高田市では消防署の防災担当の方にお話を聞くことができた。東日本大震災の検証報告書に基づいて震災時に何が起こっていたのかをお話しいただいた。資料には避難するタイミングによる被害の状況や、避難場所の差による被害の状況などが仔細にまとめられており、その上で得られた教訓を反省しどのように活かしていくかについてお聞きすることができた。また震災の反省から作られた避難マニュアルでもその姿勢が見て取れ、未曾有の大災害を受けて今後どのようにするべきかを徹底的に考慮している姿が感じ取れた。また、堤防などのハード面での防災だけでなく、人的な面についての防災にも力を入れているといい、過去の経験や伝承に囚われすぎることなく、「命を守るためのまちづくり」を進めようという姿を知ることができたと思う。

3. 文化遺産調査

今回は既に調査した常膳寺と向堂観音堂、陸前高田市ではないが岩手県の真城寺、宮城県の地福寺、湊浜薬師堂の調査を行った。特に今回の地福寺の調査では等身大の地蔵菩薩立像に須弥壇から降りていただくという経験をすることができた。今までの調査現場では等身大に達するような像を動かした経験はなく、特に今回の調査は須弥壇上の高い位置にあり降りていただくためには様々な工夫と適切な判断が必要だと言うことを改めて感じた。また限られた時間の中でいかに効率的に作業するかということの大切さも感じた。こういった仏像の調査について私はまだまだ経験不足である。数度調査に関わったことはあるが、以前の経験と同じことをすればよいときとそうでないときがあり、その判断も自分でしなければならない。そして安置されている堂内の状況についても目を配る必要もあり、非常に注意力と集中力を要する作業であった。しかしながら文化遺産を間近にして調査に携わることは何よりの喜びでもあり、得るものの大きい経験だったと言える。

また、常膳寺と向堂観音堂、湊浜薬師堂については新鋭機器である 3D スキャナを用いた。3D スキャナは調査対象の情報を立体で捉えることができ、従来の写真や計測で得られる情報よりもより多くのものを得ることができる。特に向堂観音堂は、十一面観音を本尊とする気仙三十三観音の霊場であるが、道路に面した場所にあり、近くにある不動堂の本尊は既に盗難に遭っているという状況であった。このような文化財、特に仏像の盗難事例は全国で跡を絶たず、その原因は地域の過疎化やコミュニティの変化による管理の困難さなどといった様々な問題点によって生じ、それらの問題ゆえにその対策も簡単でないことから全国の自治体や管理者が頭を悩ませる現在進行系の問題である。その解決法ではないにしる一つの対策法としてこの 3D スキャナは有効である。すなわち盗難被害が懸念される像を 3D スキャンし、得られたデータを 3D プリンター等によって出力してレプリカとして用いることで盗難被害を防ぐ

というものである。このようにレプリカを作って本物は安全な場所に移座するという方法は今や珍しく無いが、本来あるべき場所から文化財を切り離すことでも有るし、またその場所ゆえの信仰の形態を歪めることにもなりかねないとも感じる。今回の調査中にも観音堂周囲の草刈りに従事していた方々が時に手を止め、十一面観音像を拝み見る姿は印象的であった。文化財はただ文化財として存在するばかりでなく、人がいてこそとの思いを強くした。



向堂観音堂での調査風景

4. おわりに

今回の調査団に参加してみて、震災の体験について当初考えていた以上にお話を伺う機会に恵まれた。そして、常々語っておられたのはこの体験を通して何を伝えていけるか、地域のために何ができるかということであった。我々の調査がその一翼を担うことができたのならば、それに勝る喜びはない。今回の体験を通して、さらに陸前高田市の理解に勤めたいと思う。

また、今回の調査で様々な面で協力をいただいた現地の方々に、改めて御礼を申し上げたい。本当にありがとうございました。

陸前高田での調査を振り返って

文化遺産教育専修 4回生 佐野宏一郎

(1)はじめに

2016年9月7日から10日にかけて、平成28年度の陸前高田文化財調査が行われた。昨年に引き続き二度目の参加となった今回の調査では、文化財の三次元計測を担当し、調査や一年ぶりに訪れた町の様子から、被災地の今を考察した。

(2)一年ぶりの陸前高田市を訪れて

9月7日の夕方に陸前高田に到着した。東北では夏の終わりが近づいているようで、日の落ちかけた市内の空気は少し涼しく感じた。着いて間もなく海沿いまで歩いた。紫色の夕日に照らされた入り江に打ち寄せる波は、非常に静かで優しさをも感じさせた。しかし、一方で陸の方に目をやると、静かな入り江には到底似合わない、巨大な防潮堤が横たわっていた。建設中の防潮堤は約2キロに及ぶ予定で、陸前高田市街を津波から守る役割を新しく担うという。

新しい陸前高田の姿は巨大な防潮堤だけではない。 去年まで町中に張り巡らされていた巨大なベルトコンベアも活躍を終え、架け橋が残るのみとなっていた。 しかしこのことは、少しずつでも確実に、まちづくりが進んでいるという証拠でもある。実際に今回訪れた消防防災センターやりくカフェなど、震災後に出来た施設は数多くある。街は新しい陸前高田市へ変容していくことだろう。



巨大な防潮堤が入り江と被災地を分ける

また、変わりゆく街は目に映るものだけではない、ということを今回の研修で気づかされた。陸前高田市防災課の中村氏は「震災時、最初の津波予報は3メートルと発表されました。3メートルを前提とした放送を流し続けたことで、それを信用した多くの市民が犠牲になりました。まさかあのような大津波が来るとは思っていなかったのです。それを教訓に『空振りを恐れない警報発表』を意識するようになりました」とおっしゃっていた。震災での悔しい思いを繰り返すことのないよう、失敗を恐れずに、避難発表の基準を下げたのである。これは、9割が空振りであっても、1割の確かな避難が成功することを大切にしたいという震災の教訓である。確かに、陸前高田を訪れた去年・今年と2年続けて滞在中に大雨による避難準備情報が発令された。このことは、単に陸前高田を訪問中に大雨が降っていただけでなく、空振りを恐れない精神、震災の教訓が示されていたようにも思える。しかし、普通私たちは、空振りが多いとその分批判が多くなるのではないかとも考えがちである。失敗はその自治体の信用問題につながるからだ。実際に震災を経験した自治体であっても、陸前高田のように根本的に考えを変えた例は少ない。しかし、中村氏は「苦情は今まで一件もない」と胸を張る。

陸前高田市は、震災での反省を糧に、見た目だけではなく、行政システムなどの内側からの変化を 進めていた。確かに、巨大な防潮堤や目新しい建物ははっきりとわかる変化ではある。しかし、最も 重要なことは目に見えない変化、一人一人の心境の変化なのではないだろうか。その点、陸前高田で の変化は非常に画期的なことだ。陸前高田は津波の被害によって、行政などの町のシステムをほとん ど失った、被災地でも稀な自治体である。そのような背景のある街だからこそ気づいた考え方がある のかもしれない。この転換が、将来の防災を根本から変えるはずだ。

(3) 文化財調査

陸前高田における文化財調査は「仏像等の文化遺産を調査し、その価値を明確にすることが、陸前 高田市及び周辺市町村の市民を元気づけることになる」ということを前提に活動している。全てが流 されてしまった被災地で、かつての文化の記憶を取り戻してほしい。また、変容する街の中でも、そ の記憶をとどめ後世へ伝えていってほしい。そんな願いから文化財調査は成り立っているのである。

今回の調査では主に三次元計測を担当し、向堂観音堂十一面観音菩薩坐像、常膳寺千手観音菩薩立像、湊浜薬師堂磨崖仏の三次元計測を行った。三次元技術による文化財の計測は、この調査の意義に対して、多くのメリットがあると考える。

例えば、湊浜薬師堂磨崖仏は実際に津波による 浸水被害を受けた被災文化財である。もともと比 較的風化のしやすい凝灰岩の層に彫られた石仏へ の津波のダメージは大きかったようだ。衣の襞は 剥がれ落ち、表面もはがれかけている部分が多数 確認された。このまま保存処理を行わなければ、 風化が進行していくことが明白で、現状の記録が 急務とされていた。従来の記録方法では写真撮影 に留まっていたが、三次元計測による空間自体の 記録が、より明確な記録を可能にした。



湊浜薬師堂での三次元計測の様子

また、向堂観音堂の隣には川向不動尊があるのだが、こちらに祀られていた不動明王像は盗難の被害に遭い、未だに見つかっていない。博物館などの適切な保管設備から離れた在野の文化財は、常に盗難の危機にさらされているのである。厳重設備で保管される文化財は全体のほんの一握りで、ほとんどの文化財が危険にさらされているのが現状だ。向堂観音堂十一面観音菩薩坐像も例外ではなく、盗難の危機にあり、管理する寺院もこの現状に悩まされていた。今回三次元計測を行ったことにより、計測データを3Dプリンタで出力することで、複製の作成を可能とした。これにより、像の厳重保管が可能になり、文化財を後世に伝えられる可能性が大きくなった。

このように、今回の調査では、将来現状の維持が難しいと考えられる文化財に焦点を当て、三次元計測を行った。かつての文化の記憶を後世に伝えることも、その証拠であるモノ自体が失われてしまったら、記憶の風化スピードは速くなってしまうばかりだ。現状を記録することで、記憶の補完に貢献できたと考える。また、デジタルデータは現状劣化することのない唯一の記録方法であり、記録自体の劣化がほとんどないということが非常に大きなメリットである。適切な保管さえすれば、現状の記録を未来永劫残すことが出来るのである。今回の調査で、地域の方々が文化財に対する関心を高め、誇りをもって元気づけられることと共に、後世に残したいという気持ちが高まっていただけるのならば、それこそ本望である。

(4)おわりに

陸前高田での文化財調査も今回で2回目の参加となった。今年度で大学を卒業することもあり、これが最後の調査である。陸前高田での調査を通して、文化財を間近で調査できる機会をいただき、また、文化財を後世に残す重要性を学んだ。奇しくも、来年以降も社会人として文化財を後世に残すお手伝いができることとなった。陸前高田市というフィールドで学んだことを、将来への文化財保存の担い手として活かしていきたい。

第5次陸前高田市文化遺産調査に参加して

理科教育専修 修士2回生 後藤田 洋介

第5回陸前高田市文化遺産調査として、陸前高田市を中心に3泊4日の調査活動に参加した。この調査では、文化遺産の調査、防災教育教材の作成、ESDの教材づくりを目的として行われた。この調査では、岩手県奥州市の黒石寺、陸前高田市教育委員会、唐桑半島ビジターセンターなどを訪問した。文化遺産調査班では、真城寺や、地福寺、向堂観音堂、常膳寺、薬師神社、湊浜薬師堂などで3D計測をはじめとする文化財科学・美術史学の手法を用いた調査を行った。防災教育班では、津波体験館での津波の疑似体験や陸前高田市交流プラザでの聞き取り調査、避難所運営を行っていた方への聞き取り調査、奇跡の一本松の見学などを行った。

この陸前高田市文化遺産調査を通して感じ、学んだことを3つにまとめ述べる。その三つとは、一つ目に昨年度との景色の変化について、二つ目に避難所の運営から学んだことについて、三つ目に自分の五感で感じることについてである。

一つ目の昨年度との景色の変化については、昨年度、泉増寺の境内で、協力者の松坂さんに聞き取り調査を行っている際に、「復興作業はまだまだかかる。10年後同じ景色からどんな風景が見えるのか、ぜひ見に来てほしい。」とおっしゃったことがとても記憶に残っていた。昨年度の写真を振り返り、今年度の様子も同じ泉増寺の境内から同じアングルで写真を撮ったところ、高台が造成されていたり、空き





昨年度の泉増寺からの風景(左)今年度の風景(右)

地になっていた場所に区画整理が行われていたりと、様々な変化を見ることができた。また、昨年度は 建設を開始したばかりであった海岸線沿いには、堤防や水門が作られていた。また、今年度初めて訪れ た奇跡の一本松では、モニュメント化された一本松を見ることができた。このモニュメントは近隣の電 力会社のボランティアでライトアップされており、さらには、耐久年数が 10 年であることを初めて知 った。以上から、刻一刻と変化する陸前高田市の様子を知ることができた。

二つ目の避難所の運営から学んだことでは、今回の陸前高田市での調査では、避難所の運営についてインタビュー調査を行うことができた。三日目に訪れた菅野さんのお話では、初めは近隣の大きな避難所に避難をしたが、住民間でのコミュニティに悩み、避難所を変えたことや、避難しているときに、被災して、避難しているのは自分だけでなく、自分の食事のお世話は自分でしないといけないことを、避難所を運営している事務長から言われて気づいた経験などをうかがうことができた。また、市の避難所には設定されていなかったが、広田半島にあったオートキャンプ場を避難所にして、その運営に携わっ

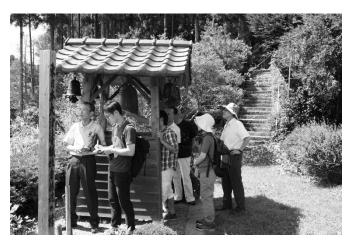
ていた千田さんのお話では、オートキャンプ場の設備を生かした避難所の運営をうかがうことができた。このオートキャンプ場の避難所では、灯油の備蓄があり、それを用いて、自家発電機を回したり、暖を取ったりすることもできた。また、広田地区では、昔から消防団の出動の際に炊き出しを行ったりする文化があり、それも作用して、各家庭の備蓄米を利用して食事をとることができていた。千田さんは、避難所の運営には、まず、公平性が必要であり、その場のリーダーにはみんなからの信頼感、そして決断力や臨機応変に対応する力が必要であるとおっしゃっていた。二日目に訪れた陸前高田市の防災課の

中村さんのお話では、現在の陸前高田市の避難の 方法などをうかがうことができた。陸前高田市で は、避難を促すために、災害が起きる可能性が出 たときに、避難準備速報が出るようなシステムに なっている。それは、予報では、災害の規模が小 さくても、どのようなことが起きるのかわからな い、避難をして、災害の規模が小さくてもよいと いう考えの下行われている。また、避難する場所 も、避難訓練の時に一つの場所を決めるのではな く、住民それぞれが、判断し、より安全な場所を 選べるようにしているという話をうかがうことが できた。避難所の運営にしても、避難にしても、 それぞれの人が、臨機応変かつ、決断力をもって 行動しないといけないことが分かった。

三つ目の自分の五感で感じることについては、 昨年度も実際に現地で話を聞くこととして感じた ことであるが、今年度も、文献ではなく自分の目 で見て、自分の耳で話を聞くことが大切であると 感じた。それを最も感じたのは、菅野さんのお話 を聞いているときである。菅野さんは、幸いなこ とに自宅が地震でつぶれなかった。そんな菅野さ んが避難所で避難をしていると、自宅が残ってい



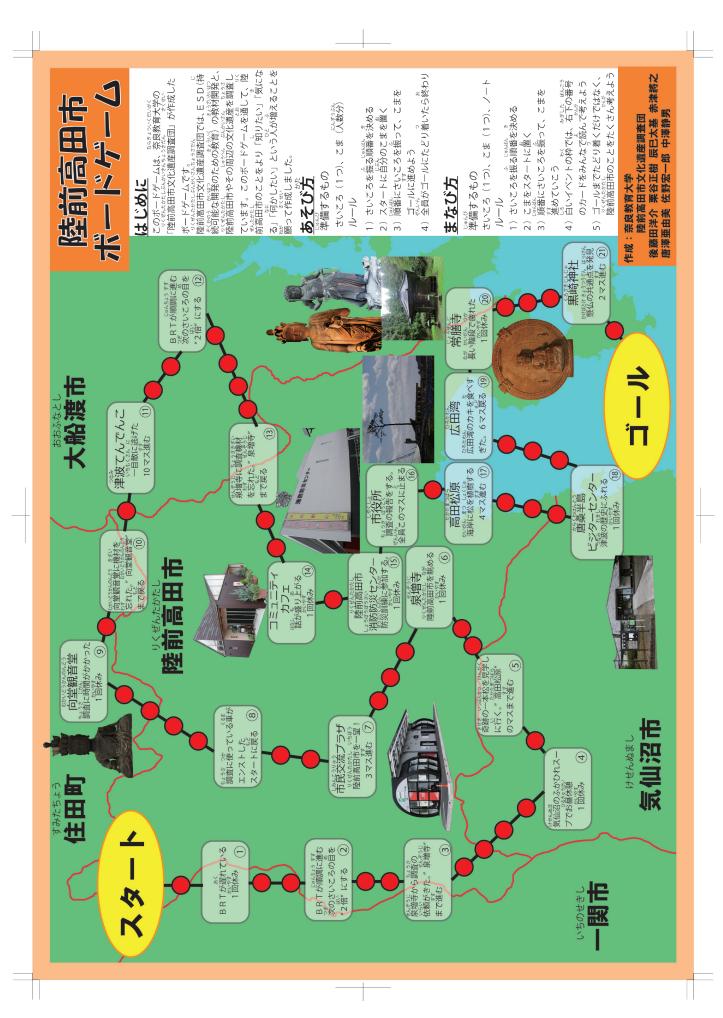
千田さんのお話をうかがう



泉増寺から景色を見ながら、説明を受ける

るのに避難所にいることへの苦情や、震災直後にコミュニティに混じれなかったことで、数か月の間、食料をコンビニで購入していたことなど、当時の体験を聞くことができた。この話を聞いている間、菅野さんはあまり悲しい表情ではなかったが、体験としては苦しく残っているのではないかと感じた。話し手の表情や雰囲気までは、文献等では捉えることが難しい。実際に自分が動き、現地で経験をされた方々の話を聞き、その表情までもとらえる必要があると感じた。

以上のように、昨年度も参加したことを再確認するとともに、今年度は避難所運営に関するお話を多く聞くことができた。陸前高田市で学んだことを、これからの自分の活動に活かしていきたいと思う。



补 温料

陸前高田市文化遺産調査団で調査した、陸前高田市のいろいろな情報が書かれています。 ボードゲームと一緒に楽しむもよし、カードだけで楽しむのもOKです 破線をハサミで切り取って使ってね

3)避難所

the control でだり で一人で暮らすお年寄りのBさん、中 で一人で暮らすお年寄りのBさん、中 でしゅっとん 国出身のCさん一家、出張で県外から さん一家 (赤ちゃんがいる) 避難所生 ごろ (赤ちゃんがいる) 避難所生 ごをするなかで、それぞれの人にどの 桑たDさん (熱がある)、△科出当のE ひなんじょ たいくかん 避難所の体育館にたくさんの人がやっ ような配慮をすればよいでしょうか?

フ市民な消プリザ

であるまま お 手押し車を押してい になって逃げました。もし再び震災が あったまでおいい。 起こった時、高齢者の方が逃げ遅れな いようにするためには事前にどのよう なことができるでしょうか Dddのからゆう A さんは避難中、

4) 避難の方法

まがかぞく他の家族は、 となりまち けぜんぬまし あそ き 隣町の気仙沼市に遊びに来ていたとき がるがるのであるに うみ 海のそばを通らなければいけませ | あなたはどのように避難しますか? | ん。 建波が来るまで 1 時間です。 Ottaythvites で |C、津波警報が出ました。 | ぜんいからくぜんたかたし |全員陸前高田市(こいます。

8 気仙三十三観音

けせんぐんない かんのんばさつ てら 気仙郡内の観音菩薩のあるお寺やその \dot{c}_2 3 \dot{c}_3 \dot{c}_4 \dot{c}_4 \dot{c}_5 \dot{c}_5 たず ある はじ を訪ね歩いたのが始まりとされていませんでうじ むかんごかんのんこう じょうぜんじ すかんごう はんそうじょうぜんじする 泉増寺や向堂観音堂、常膳寺など という人が両親の供養のために観音像 も含まれています

1) 陸前高田の文化財

2) 游難所

ぶつぞう きょうつうてん ボードゲームの4つの仏像の共通点は どこでしょうか?



6泉増寺

5) 高田松原

たなだい かんかんご した こやす 高台にある観音堂とその下にある子安 堂からなるお寺です

もいきもんだ 世紀前後につくられたと考えられてい 「神紀、まいま、もっと、ふる よっそう がんのんどう やく かんまえ ままり 1000 年前 つくられた仏 ます。これは気値地域で最も古い仏像 像が受け継がれてきました。像の高さ は16.2cm とがさな仏像ですが、10 w.c.c.v.u.k3 Inviv. 直えられました。白砂青松の景観とし きまざま ひと tivibox あい

10避難所3

堂観音堂

(6)

Lukahで まち ひと あつ か 震災後、2つの町から人が集まった仮 もひゅぶく ちいき じょうほうし くば 設住宅では、地域の情報誌を配ったり、 す。なぜこのようなことをしているの ベントがたくさん聞かれたりしていま こうりゅう | みんなで家庭菜園をするなどの交流イ でしょうか かのんどうなおもしだいな観音堂です。室室は代につくられたいがは、いかができたといっているというとなっているとあるがあった。と考えられる十一面観音坐像がまつら りくぜんたかだし となりまち すみたちょう ちい 陸前高田市の隣町の住田町にある小さ

がに対切に持られています

11)津波てんでんこ

いう昔からの言い伝えです

ミュニティカフェ (14) □

əh/tà つど ばしょ 「皆が集える場所があるといいな…」と nb たち おも しんさいご つく いうお母さん達の思いで震災後に作ら ばしょ ちいきじゅうかん アなど、数々の出会いの場となりまし げんざい げんざい れた場所です。地域住民やボランティ

18 唐桑半島

ドジターセンタ が、でした。 一様く揺れたら津波が来る」

『ここから下に家を建てるな』という 高災では先人や津波石の教えによって 助かった人がいます。

(13) 駅前通り (12)オートキャンプ場

ストーブで酸をとることができました。 \lceil 「後で逃げる」と貰われてしまいました。 $\frac{\partial \partial \mathcal{L}}{\partial \mathcal{L}}$ 遊難所に指定されていませんでしたが、 $\frac{\partial \partial \mathcal{L}}{\partial \mathcal{L}}$ だのように呼びかければ避いざずってみると避難所として十分に $\frac{\partial \partial \mathcal{L}}{\partial \mathcal{L}}$ 難しようと思ってもらえるでしょうか? 「げないと!」と噂びかけても「茶ُ失美」 スホギーンカ 車を使ったキャンプができる場所です。 しいさい 震災の時には、発電機があったので電 膏が確え、灯油の備えが 5000L あり 機能しました。

消防防災センター (15)陸前高田市

16市役所

一方、すぐ近くにご語い山があります。 あなたなら、どこに、どんなことに注 がしました。手先の防災マップを覚る つなみはつせい そうてい まち ぼうさいくんれん さん 津波発生を想定した町の防災訓練に参 指定避難所まで2kmもあります。 して避難しますか?

19 広田湾

いかだや船が流されてしまいましたが、 漁師さんたちの努力によって再びおい 力キの生産は県内1位です。3年間か ブランドとして全国で発売されていま けて着った大きな身のカキは、広田湾 が、 ²⁰⁰ す。2011年の津波では力キを育てる しいカキがつくられています

17高田松原

鑑められています がい、つた 未来に伝えていくために、修学旅行で やってきた子どもたちや、先生、観光 なってきた子どもたちや、先生、観光 で訪れた人が防災を学べる地を目指し りくぜんたかたし しんさい じんだい ひがい 陸前高田市では震災での甚大な被害を ています。 いかくしょっした 市役所の人たちが防災を伝えていくだ がでなく、私たちにも何かできること

21 黑崎神社

はないでしょうか?

くるさぎじんじゃ かげだり もくせい じゅういちめんかんのん 黒崎神社の懸仏は木製で十一面観音が はいかおう ねん いる概念を記し、禁念を関している。 ハサロチヒナ スムルムピポラ トキビ スワラタラ ビの分け 懸仏とは円盤状の板に仏像を取り付け 明応5年(1496) くろさきじんじゃ 黒崎神社にはの懸仏があります。 てつり下げられるものです 夢られています。

があんで ほんそん じゅういちかがかんでう 観音堂の本尊は十一面観音像で、3m りくぜんたかたしおともちょう 陸前高田市小友町にあるお寺です。

茶られました。

と考えられています。

陸前高田市文化遺産調査におけるESD教材開発(6)

- 「自助」の力を育む ESD 防災教育-

栗谷 正樹

(奈良教育大学大学院 教科教育専攻 社会科教育専修)

後藤田 洋介 辰巳 太基

(奈良教育大学大学院 教科教育専攻 理科教育専修)

赤津 將之

(奈良教育大学大学院 教科教育専攻 造形表現 (美術・書道)・伝統文化教育専修)

唐澤 亜由美

(奈良教育大学 家庭科教育専修)

佐野宏一郎

(奈良教育大学 文化遺産教育専修)

中澤 静男

(奈良教育大学 次世代教員養成センター)

The Sixth Teaching material creation for Education for Sustainable Development at researching cultural heritage in Rikuzentakata city

— ESD and Education for Disaster Prevention to Foster the Ability of "Self-Help" —

Masaki KURITANI Yosuke GOTODA Taiki TATSUMI Masayuki AKATSU

(Graduate School of Education, Nara University of Education)

Ayumi KARASAWA Koichiro SANO

(Undergraduate Student, Nara University of Education)

Shizuo NAKAZAWA

(Teacher Education Center for the Future Generation, Nara University of Education)

要旨:陸前高田市文化遺産調査を実施して5年目となる。岩手県陸前高田市は平成23年に起きた東日本大震災において多大なる被害を受けた。陸前高田市では、このような被害を二度と出さないように、行政やコミュニティのレベルでの防災の取り組みが行われていることを本調査によって再確認することができた。本稿では、「自助」をテーマとした学習を提案する。児童が自然災害を自らの問題と捉え、情報を批判的に思考し、自らの行動を変革させる、防災教育を通じたESDの学習を提案する。

キーワード: 持続可能な開発のための教育 Education for Sustainable Development 東日本大震災 Great East Japan Earthquake 自助 Self-Help

1. はじめに

奈良教育大学では、地域と連携した「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた持続可能な開発のための教育活性化プロジェクトの一環として、陸前高田市を中心とした文化遺産調査に取り組んで5年目となる。今年度は、「ESDを核とした教員養成における高度化一教員養成・研修における ESD モデルプログラムの開発と普及」の一環として、本学教員2名、大学院教育学研究科修士課程4名、学部生2名からなる調査チームで、2016年9月7日から10日にかけて、文化財科学や美術史学の知識を活用した文化遺産調査、及びESD・防災教育の研究開発

に取り組んだ。

今回の調査の主な日程は、以下の通りである。

1 日目

- ・奥州市真城寺阿弥陀如来像立像の調査
- ・同市黒石寺薬師如来坐像と十二神将立像の見学
- 2 日 目
- ・陸前高田市教育委員会への表敬訪問
- ・陸前高田市消防防災センターでの聞き取り調査
- ・コミュニティカフェでの聞き取り調査
- 宮城県気仙沼市地福寺地蔵菩薩立像の調査
- 3 目目
- ・陸前高田市向堂観音堂十一面観音坐像の調査
- ・避難所生活の聞き取り調査

- ・常禅寺十一面観音菩薩立像、千手観音菩薩立像の調査 4日目
- 大崎市薬師神社の十二神将立像
- ・宮城県七ヶ浜町湊浜薬師堂の磨崖仏の調査

本稿では、消防防災センターでの聞き取り調査、避難所 生活の体験や、津波体験の聞き取りなどで学んだことを中 心に、災害時の「自助」の力の育成を目的として作成した 教材について報告する。

昨年度の研究報告では、陸前高田市での聞き取り調査を 踏まえ、復興中のまちづくりの精神が、日本ユネスコ国内 委員会が提唱している、ESD で育てたい価値観が共通し ていることを見いだし、「まちづくりを題材に教育活動を 行うことによって、持続可能な発展に関する価値観を養う ことができ、持続可能な社会に参画していく意思を養って いけると考えられる」(1)とし、自分たちのまちに興味を持 つような教材を作成した(後藤田・中澤 2016)。今回の調 査では、陸前高田市消防防災センターでの聞き取り調査に おいて、「東日本大震災前では、指定された場所に集合す ることが重要視されていたが、現在では、ハザードマップ を見て、考え、どこに逃げるのかを自分で決めておく必要 がある」という話を聞くことができた。また、「(海岸線に 近い) 駅前通りの店舗では、地震の片づけをしていた。「片 づけよりも避難しないと」と声を掛けたが、半数以上の命 が失われた」と、昨年度も訪れたコミュニティカフェの方 から話をうかがうことができた。これらのことから、災害 時に自ら避難経路を考え、避難を実行に移していくことを 主題とした ESD 教材の開発を着想した。

2. 防災とESDについて

片田 (2012) は、防災では主体的な行動が重要であるとし、自然災害から身を守るためには、「人為的に与えられた想定にとらわれることなく、また自らの命を行政に委ねることなく、主体的にその時の状況下で最善を尽くすこと以外にありません。」(2)と述べている。換言すると、自然災害から身を守るためには、与えられた情報を批判的に思考し、主体的に行動することが必要であるといえるだろう。ESD では育みたい力の一つとして批判的思考が挙げられており、行動の変革が求められていることから、防災教育が ESD で取り扱う一つの内容としてふさわしいものであるといえるだろう。

東日本大震災前から防災教育に積極的に取り組んでいた気仙沼市教育委員会では、東日本大震災の教訓として、「自助」が必要不可欠であると結論づけている。「自分の置かれている状況をもとに、より良い行動について考え、積極的に行動しようとする態度」が必要であるとし、「自ら考え行動しようとする態度」を気仙沼市教育委員会独自のESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度として設定している。(3)

3. 陸前高田市の東日本大震災検証について

陸前高田市では、平成23年に発生した東日本大震災で 1757 名が犠牲となった。また、市役所や避難所も被災し た。この被害に対して、「「なぜこれほどの被害がおき、人 命が失われたか」の要因を検証するとともに、災害対応の 教訓を整理し、今後発生が予想されている南海トラフ巨大 地震、首都直下地震などに対する全国自治体の防災計画の 参考となる」(4)ことを目的とし、『陸前高田市東日本大震 災検証報告書』(以下検証報告書)が作成されている。こ の検証報告書では、大きく5つのことが教訓として述べら れている。一つ目に避難が何よりも重要であること、二つ 目に避難所に逃げたら終わりではないということ、三つ目 に公的な役割を持つ人の安全の確保が必要であること、四 つ目に災害に強い安全なまちづくりが必要であること、五 つ目に社会的弱者も安全に生活できる社会の実現が必要 であることである (5)。本稿では、自助についての教材を 提案するために、一つ目の避難が何よりも重要であること、 および二つ目の避難所に逃げたら終わりではないという ことについて着目し考察する。

まず、一つ目の避難が何よりも重要ということに関して、避難のタイミングと被害状況に関する調査では、津波死亡・不明の人の5割が津波の到達後に避難していたのに対して、被害なしの人では8割の人が地震の発生直後や津波の到達前に避難を開始している。このことから、「主に地震発生時に津波浸水域にいて、想定されていた状況よりさらに積極的な避難行動を取らなかった、あるいは避難が困難だった人が死亡・行方不明となった可能性がある。」(6)と述べられている。災害発生の直後の積極的な避難が必要であり、それらを決意するための防災への意識づけが必要であるといえる。

二つ目に避難所に逃げたら終わりではないということについては、同書に「東日本大震災当時、津波避難所として指定していた一時避難所 67 か所のうち 38 か所が被災するとともに、9 か所で推計 303 人から 411 人の尊い命が失われました」(7)と述べられている。一方、学校管理下において被害が少なかった要因として、教職員の的確な判断があったことや、地域の住民が、さらに安全な場所に導いたことで被災を免れたケースなどがあった。以上のことから、避難所に避難するだけではなく、場面に応じた判断が必要であり、今いる場所よりも安全な場所を探していくことが必要であるということが分かる。

以上の2点から、災害時の積極的な避難や、臨機応変な 避難を行えるような防災教育が必要であることが明らか である。

4. 聞き取り調査について

今回の調査では、陸前高田市民を中心に、様々な人々に聞き取り調査をすることができた。これらの調査結果を以

下に示す。

- ・東日本大震災の前では、指定された場所に集合することが重要視されていたが、現在では、ハザードマップを見て、考え、どこに逃げるのかを自分で決めておく必要がある。(陸前高田市消防防災センター職員)
- ・行政の職員のための初動マニュアルを作成した。そのマニュアルでは、業務よりも命が優先であること、津波の到着 10 分前には避難が完了しているようにすることを規定した。(同上)
- ・(海岸線に近い)駅前通りの店舗では、地震の片づけをしていた。「片づけよりも避難しないと」との声掛けもあったが、半数以上の命が失われた。(コミュニティカフェ店員)
- ・避難所指定されていないオートキャンプ場にたくさんの人が避難してきた。スタッフとして活動できる人の取りまとめや、避難所の運営を行っていた。(災害対策特別委員会関係者)
- ・老人ホームの職員が、通院状況や薬の服用状況などの調査を自主的に行っていた。この活動は医療スタッフへの引継ぎをスムーズにした。(同上)
- ・便利な駅前ではなく、高台に住んでいた。「なぜ、あんなに不便な所に住んでいるのか」と言われたこともあったが、今ではその判断が間違っていなかったと思っている。その経験から、周りの意見に流されずに、自分の信念を突き通すことも重要であると考えている。(高田松原を守る会会員)

これらのインタビューを通じて、以下の知見を得ることができた。

- ・何よりも避難を優先すること
- ・避難後もより安全な場所に移動したり、避難所の運営に 携わったりするなどの行動が必要であること
- ・行政や周囲の意見を鵜呑みにせず、自ら批判的に考え、 行動していくこと

これらの知見を活かし、次章では災害発生時の「自助」の力を養うための学習指導案を提案したいと思う。

5. 学習活動の概要

これまでで、防災では、主体的な行動と、最善を尽くすことが重要であり、それらを身に付けることこそが ESD であるということを述べ、さらに陸前高田市東日本大震災検証報告書から、「避難することがまず重要であること」ことが重要であり、それらを身に付けることこそが ESD であるということを述べ、さらに、陸前高田市東日本大震災検証報告書から、「避難することがまず重要であること」「避難に際しても、臨機応変に行動すること」が必要であると述べた。陸前高田市文化遺産調査における聞き取り調

査では、陸前高田市消防防災センター職員の「ハザードマップを見て、考え、どこに逃げるのかを自分で決めておく必要がある。」という意見や、「便利な駅前ではなく、高台に住んでいた。「なぜ、あんなに不便な所に住んでいるのか」と非難されたこともあったが、今ではその判断が間違っていなかったと思っている。」という聞き取り調査に表れているように、周囲に流されることなく、自ら判断をし、行動するしていくことが必要であると考えられる。以上より、学習活動として、災害時にどのように避難するのかを題材とし、情報を批判的に捉え、自らの行動を決定していくような活動を取り入れた学習を提案したいと思う。

6. まとめ

平成 28 年度陸前高田市文化遺産調査の一環として、災 害時の避難方法を考え、「自助」の意識を育む教材を提案 した。防災では、自らの身を守る「自助」、周囲と助け合う 「共助」、そして行政からの支援である「公助」が「3助」 として有名であるが、その中でも自らの身を守る「自助」 を行う力は、重要な位置づけを占める。東日本大震災以前 の陸前高田市民への意識調査で「チリ地震津波は、高田小 学校まで来なかった。そのため、津波は学校まで到達する とは考えていなかった。」(8)という証言や、東日本大震災 が顕在化させた防災の問題点として「防災が進むことに よって、社会と人間の脆弱性が増し、住民を「災害過保護」 というべき状態にしてしまう」(9)と片田(2012)が指摘 しているように、過去の災害で被害が小さかったために、 自分が直面している災害でも大丈夫であるというような 意識が生まれたり、想定にとらわれることで、被害が増し てしまったりすることもあり得るだろう。現在、陸前高田 市では、住民が身を守るために、自ら避難する場所や経路 を考え、避難情報が出されるとともに、実践されている。 災害から月日が経過した際でも、私たちも自らの身を守る ことのできる防災教育を目指していきたい。

表1. 単元名、対象学年、単元の目標、評価規準

単元名(対象学年・教科)	災害時に自分の身を守る方	法を考えよう (小学校6	年生 総合的な学習の時間)		
単元の目標	・震災やハザードマップ、避難経路に関心を持ち、自分たちで考えた避難方法を行動				
	に移そうとする。(関心・意欲・態度)				
	・状況に応じて、より安全な避難方法を判断し行動に移している(思考・判断・表				
	現)				
	・ハザードマップの検討など、必要な情報を集めたり読み取ったりしている。(資料活				
	用の技能)				
	・想定以上の災害が発生することがあることを知り、避難の重要さを理解している。				
	(知識・理解)				
関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解		
①震災やハザードマップに	①状況に応じて、より安	①ハザードマップの検	①避難の重要さを理解すること		
関心を持ち、学習に積極的	全な避難方法を判断する	討など、必要な情報を	ができる。		
に参加することができる。	ことができる。	集めたり読み取ったり	②ハザードマップの想定を超え		
②自分たちで考えた避難方	②グループで作成した避	することができる。	る被害が発生する恐れがあるこ		
法を行動に移すことができ	難方法をわかりやすく表		とを理解することができる。		
る。	現することができる。				

表2. 学習活動の概要(全12時間)

学習活動・学習内容 (時間)	指導上の留意点	◇評価・備考
1. 東日本大震災の概要について学ぶ。(1)	・視覚的な資料を用い、震災の概要を学ばせる。	◇避難の重要さを理解することが できる。(知・理①)
2. 自治体が配布しているハザードマップをもとに、グループごとに避難 経路・方法を考える。(2)	・自治会単位、もしくは自宅の近い児童でグループを組ませる。	◇震災やハザードマップに関心を 持ち、学習に積極的に参加しよう としている。(関・意・態①) ◇状況に応じて、好ましい避難経 路・方法を判断することができる。 (思・判・表①)
3. 考えた避難経路・方法を発表し、 地域の方からアドバイスをもらう。 (1)	・自治会長、防災担当の地域の方に協力 を依頼する。	◇必要な情報を集めたり読み取ったりすることができる。(技①)
4. 陸前高田の事例をから、ハザードマップの想定を超える被害が発生する恐れがあること、震災を教訓に現在取り組んでいることを学ぶ。(1)	・陸前高田市のハザードマップ(震災前) や津波浸水域のマップ等を用いながら、 当事者の思いや体験談を活用する。	◇ハザードマップの想定を超える 被害が発生する恐れがあることを 理解することができる。(知・理 ②)
5. これまでの学習を踏まえた上で、 避難経路・方法の修正を行う。(3)	・学校にいるとき、自宅、海の近くなど、 複数の場所や、地震、津波、大雨など、 様々な災害を設定する。	◇状況に応じて、より安全な避難 経路・方法を判断することが出来 る。(思・判・表①)
6.各グループで作成した避難方法を 発表し合い、全体で共有する。(2)	・共有した方法を元に、自分達の避難方 法を見直しさせる。	◇グループで作成した避難方法を わかりやすく表現することができ る。(思考・判断・表現②)
7. 実際に考えた避難方法を用いて避 難訓練を行う。(2)	・保護者の方、地域の方と協働して避難訓練を行う。	◇自分たちで考えた避難方法を行動に移すことが出来る。 (関・意・態②)

引用参考文献

- (1)後藤田洋介・中澤静男(2016)、「陸前高田市文化遺産調査におけるESD教材開発(5)一まちづくりを題材にしたESD」、奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要、第2号、pp. 205-209.
- (2) 片田敏孝 (2012)、人が死なない防災、集英社、pp. 51-52
- (3) 気仙沼市教育委員会(2014)、「平成25年度気仙沼市教育研究員研究紀要」、p. 49.
- (4)陸前高田市(2014)、「陸前高田市東日本大震災検証報告書」、p.8.
- (5) 同上、p. 2-3.
- (6) 同上、p. 62.
- (7) 陸前高田市 (2014)、「陸前高田市東日本大震災検証 報告書 概要版」、p.6
- (8) 前述、陸前高田市、「陸前高田市東日本大震災検証報告書」、p.81
- (9) 前述、片田 (2012)、pp.46-47

(出典:『次世代教員養成センター研究紀要第3号』奈良 教育大学次世代教員養成センター、2017年3月)

田邊希文『封内風土記』(明治二十六年九月、仙台叢書出版協会)塩澤寛樹『鎌倉時代造像論』(平成二十一年二月、吉川弘文館)

和当時にはこの銘記を伴う当初の光背が遺されていた蓋然性は大きい。嘉元四年 から導かれる想定造立年代、一三世紀後半~一四世紀初と符合することはきわめて示唆的である。 に現存しており、 「背後記」として「嘉元四年三月二十四日」の年月日を記している。「胸上記」とされる「長禄四年九月廿七日」 「嘉元四年三月」 一十四日」 も実見して記された可能性が高いとみられる。 (=徳治元年、一三〇六)が地福寺地蔵立像の様式・形式 現在本体銘記にこの年月日は見当たらないが、 の年月日は胸部材内面

地と鎌倉の地との結びつきを物語る重要な実例となる。 鎌倉地方仏師と想定する見解があった程度だった。嘉元四年を造立年代の目安とする鎌倉地方仏師の作と考定された地福寺地蔵立像は、当 が従来知られていたが、宮城・岩手両県下では岩手県花巻市延妙寺阿弥陀如来立像[寛元元年 化相や伝播の様相を物語る、逸することのできない作例といえよう。 ても陸路は別に困難が想定されることから、 東北地方の鎌倉時代・南北朝時代彫刻のうち、 鎌倉周辺かとみられる造像地から当地へは海路によったことが想定され、 鎌倉の地で活動した仏師の作とみられる例は、 また等身大の像を資材の不足しがちな地で造立することの困難さや、 (一二四三)、幸運・幸賢作] について作者を 福島県会津地域・磐城地域に分布すること 鎌倉時代の地域の文 運搬するにし

謝意を表したい 学「ESDを核とした教員養成の高度化プロジェクト」 -成二十八年度調査に際しても、 松坂泰盛氏、 元陸前高田市市議会議員千田勝治氏をはじめとする方々に数々のご高配を賜った。また本稿は平成二十八年度奈良教育大 地福寺住職の片山康春師、 陸前高田市文化遺産調査団による調査成果の一部である。 気仙沼市教育委員会の幡野寛治氏、学術調査を支援する会世話人及川 関係各位に対して深甚の

参考文献(抄)

大矢邦宜「仏像調査報告書(中間報告)」(未公刊。地福寺提供)

水野敬三郎編『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代 造像銘記篇 第七巻』(平成二十一年二月、 中央公論美術出版

上杉孝良 「光伝寺地蔵菩薩立像について」(『MUSEUM』 一七六号所収、 昭和四十年十二月

上杉孝良 「光伝寺地蔵菩薩像銘並びに胎内納入物」(『金沢文庫研究』一六二号所収、 昭和四十四年十月

清水真澄 「光伝寺の木造地蔵菩薩立像」 (『中世彫刻史の研究』昭和六十三年三月、 有隣堂

気仙沼市唐桑町馬場、地福寺本尊の地蔵菩薩立像

奈良教育大学 山岸公基・赤津將之

地蔵菩薩立像 平成二十八年九月の奈良教育大学陸前高田市文化遺産第六次調査では、 平成二十三年三月の東日本大震災により甚大な被害を受けたが、 (以下地福寺地蔵立像と略称) を主な調査対象とした。 地福寺地蔵立像は難を免れた。 平成十八年に気仙沼市に合併されるまで独立の町であった唐桑地域 陸前高田市に隣接する宮城県・ 気仙沼市唐桑町馬場 地 福寺本尊

おり、 二九四 や人中が開き気味の童顔とも見える顔立ちにやや後出する傾向が認められるとはいえ、 ほとんど交えない衣文に小異があるとはいえ、 れた懸垂線あるいは放物線状の衣文にも一定の類似が認められる。 もあり、 ど、一三世紀中葉〜後半の鎌倉を中心とする関東地方彫刻に顕著である。 太子立像 するはたらきには乏しく、支脚・遊脚の別も明瞭でない。このような傾向は寛元五年(=宝治元年、一二四七)慶禅作の埼玉・天洲寺聖徳 肘の張りを抑えた柱状のマッスが形成され、 地福寺地蔵立像は等身大で、平安時代後期以降本格的な寄木造の像に多用される、 鎌倉で活動した仏師により造立されたとみなすことができよう。 増慶・康増は慶派の流れを汲み鎌倉で活動した仏師とみなす意見が現在大勢を占めており、 小波には正面で折畳みを意識した分岐が認められる。これらにより布帛の畳み重なる質感の表現が目指されるが、 基本的な衣制や正面での衣文の性質、 在銘、 (銘文中に鎌倉での造立と明記される)、康元元年 増慶・ 康増等作。 以下光傳寺像と略称] 衣文は懸垂線もしくは放物線状の大波を比較的繁くあしらったうえその間に適宜小波を配して 支脚・遊脚の別をはじめ、 背面の懸垂線・放物線状の衣文の配置に至るまで地福寺地蔵立像と共通している。 は、 (一二五六) 現在鎌倉の外港六浦の地にあるうえ法量・像種も一致しており、 また神奈川・光傳寺地蔵菩薩立像[正応五年(一二九二)・永仁二年(一 康信作の神奈川・正眼寺地蔵菩薩立像 衣の下層の体勢を感じ取りにくい表現が近く、背面下半身に配さ 特に正眼寺像とは、ともに五尺余の等身像で同じ像種であること 頭体幹部前後左右四材矧ぎの構造になる。 一三世紀後半から、 地福寺地蔵立像も、 遅くとも (以下正眼寺像と略称) 鼻が短めで眉 四世紀初頭までの 下層の肉身を暗示 衣制や小波を 正 慶禅・ 面観で両 眼の間 な 康 間

|記の想定を補強するのが 『封内風土記』 の記事である。 同書では地福寺本尊地蔵について、 春日作、 あるいは湛慶作等の伝承を記した

保存状態

右手五指、左手先、各後補。持物後補。光背、台座、各後補。

伝来

一、地福寺本尊として伝来した。本堂に性善童子・性悪童子(ともに後補)を脇侍として安置される。

仙台藩の地誌である『封内風土記』[明和八年(一七七一)成稿]に、「本尊地蔵。 春日作。或爲二湛慶所」造。其背後記云。嘉元四年三月

二十四日。胸上記云。長禄四年九月廿七日。長尾小三郎之光識。」とみえる。

銘記 [現在胸部材は体部材に結着され実見し得ないため、 大矢邦宜氏 「仏像調査報告書 (中間報告)」に拠る。]

胸部材内面に、次の銘記がある。

(一)、頭・胸部材右半材から左半材

長禄四年九月廿七日

…四國住人讃州東…

:

(二)、頭・胸部材左半材

「于時亨保七壬寅年九月朔日

亀谷山地福寺現住梁峯玄津代

山城國京都間之町通丸田町下町

 \vdots

備考

一、実査 平成二十八年九月八日 (山岸公基・中澤静男・後藤田洋介・赤津將之・栗谷正樹・辰巳太基・唐澤亜由美・佐野宏一郎)

地蔵菩薩立像

宮城県気仙沼市唐桑町馬場 地福寺

木造 漆塗 玉眼 軀 像高一六七・〇 cm

「仏像調査報告書(中間報告)」に拠る。]

像高 一六七・〇 (五尺五寸一分) 髮際高 一五九・九

(単位 四) [足枘高以外は大矢邦宜氏

頂—顎

二八 五 五

七・一 面長

耳張

胸奥 三五・八

肘張 五.七

Ξ
○
○ <u>-</u>:

五. · 五. 足枘高 七:二

裾張 腹奥 面奥 面幅

形状

込まれる。 足前外側で右前に打ち合わせる。 祇支の上縁は左胸から右脇腹にかけてあらわれる。覆肩衣は右胸、右腕に懸かって袖状に垂れるが、右胸下で一旦たるみ、袈裟に一部たくし 円頂。 素髪。 大衣は左肩を覆い、右肩に浅くかかる。 髪際で頭髪部を一段高く彫出する。 右腕は臂を軽く曲げて垂下し、 上層上端は左肩から左前膊にかけてを覆い、腹前から左肩にかけ上縁を折り返す。裙は右 白毫相をあらわす。耳垂環状。三道をあらわす。僧祇支・覆肩衣・大衣・裙を着ける。 錫杖を執り、 左腕は屈臂し掌上に宝珠を捧げる。 両足を少し開いて立つ。 僧

品質構造

針葉樹 (ヒノキ) か。寄木造。玉眼嵌入。

頭体幹部は正中線及び両耳後ろを通る線で四材矧ぎとし、 表面は現状漆塗のうえ古色彩色。 以上六材はいずれも足元まで内刳を施す。 左右の袖、 右肘から先、 頭部は胸前肉身部とその枘部を含んで割首とするとみられる。 左手先、 両足先、 各別材。左足枘に小材を矧ぐ。 持物各別材 両体側部別材矧

— 32 —



図 12 宮城・地福寺地蔵菩薩立像:像底



図 13 宮城・地福寺地蔵菩薩立像:足枘



図8 宮城・地福寺地蔵菩薩立像:頭部右側面



図 10 宮城・地福寺地蔵菩薩立像:頭部右斜側面



図 9 宮城・地福寺地蔵菩薩立像:頭部左側面



図 11 宮城・地福寺地蔵菩薩立像:頭部左斜側面

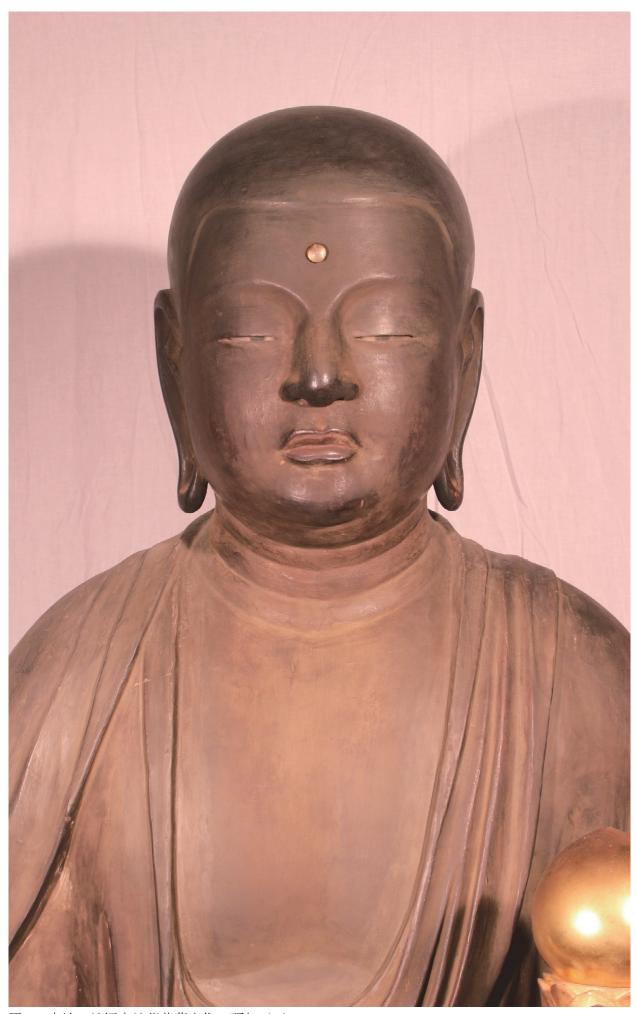


図7 宮城・地福寺地蔵菩薩立像:頭部正面



図2 宮城・地福寺地蔵菩薩立像: 全身右斜側面



図 3 宮城·地福寺地蔵菩薩立像: 全身左斜側面



全身右側面(地福寺提供)



身背面(地福寺提供)



図 4 宮城・地福寺地蔵菩薩立像: 図 5 宮城・地福寺地蔵菩薩立像:全 図 6 宮城・地福寺地蔵菩薩立像:全 身左側面(地福寺提供)



図 1 宮城・地福寺地蔵菩薩立像:全身正面(地福寺提供) -37-

宮城県気仙沼市地福寺 仏像調査報告書

2017年3月 奈良教育大学

平成 28 年度 奈良教育大学

ESDを核とした教員養成の高度化プロジェクト

―教員養成・研修におけるESDモデルプログラムの開発と普及ー

平成 28 年度 奈良教育大学 陸前高田市文化遺産調査報告書

平成 29 年 3 月 31 日

国立大学法人奈良教育大学

〒630-8528 奈良市高畑町

次世代教員養成センター ESD・教材開発領域

TEL • FAX 0742-27-9177